死と永遠のいのち⑦

バルナバ栄一の　聖書談話」（マルコによる福音書①）

今日から皆様とご一緒に聖書・・「マルコによる福音書」を読んでゆく事が出来ると思うと、嬉しいのですが、一面大変な事を言い出してしまったと後悔しているところもあります。この一年、頭の働き、特に記憶力が悪くなって、健康的にも余力がありませんし、体に色々不備な点が起こり、何時中断するようなことになるか分からない可能性もありますが、もしそのような事が起こっても、どうぞお許しくださいますように。参考文献として、市川喜一師「マルコ福音書講解」：シュラッター氏　新約聖書講解全集・②マルコによる福音書」：ウイリアム・バークレー師「マルコ福音書」：渡辺信夫師「マルコ福音書講解説教」：などを主な参考書として進めるつもりでおりますが、時にウオルター・ワンゲリン著・仲村明子姉訳の小説　聖書」新約篇を用いる事も考えています。「幻想的」な感じが私には好ましく感じられましたので用いました。健康の都合で中断するような時には、それらの本をお読み下さいますように。最初から一寸逃げ腰ですなあ。それでは、

著者マルコは、バルナバの甥でパウロの第一伝道旅行の時、途中からパウロや同行のバルナバから逃げ帰った、あのマルコ　使徒言行録１３：１３）ですが、後年ローマで投獄された時のパウロからは大変信頼されているような印象が見えます（コロサイ人への手紙４：１０）。そのマルコはずっとペテロの通訳として一緒に居りましたので、２世紀の終わり頃、パピアスという人は、「マルコ福音書は、最大の使徒であったペテロの説教の題材の記録そのものである」と語っております。この福音書が書かれたのは恐らく、西暦７０年の少し前だったろうと推定されており、四福音書の中で最も早く書かれたものだということです。マタイやルカの福音書は明らかに、このマルコによる福音書を一つの取材源としている事は、学者が間違いのない事実と認めています。さて、

神の子イエス・キリストの福音の初め　（マルコ１章１節：新共同訳）

に移りましょう。その頃　西暦３２年春・五旬祭の日）エルサレムでガリラヤの漁師ペテロが叫んでいました。「あなた方が十字架につけて殺したナザレ人イエスを神は復活させられた。私たちはその証人である。この方こそイスラエルに約束されていた救い主メシアです」と。キリストの聖霊降臨を見、キリストの復活の証言を弟子達から聞いた数千人の者が、それを信じ、イエスを、主キリストと告白したと使徒言行録は伝えています。イエス復活の告知が初めはユダヤ教の枠の中で行われたのは、ユダヤ人の父祖、アブラハムや、モーセ、ダビデ等に与えられた約束によって、メシア　ギリシャ語のキリスト）待望がイスラエル民族にあったからです。しかしイエスが西暦３２年頃、十字架につけられ、復活されてから２０年、３０年と経ってくるうち、救い主キリストの信仰者達は、ユダヤの周辺の国々に増え、西暦５０年代にはローマ帝国の首都ローマにまでいたと言われています。でも異邦人＝異教徒がユダヤ教徒になる為には　その頃はまだキリスト教はユダヤ教の一分派でした）、割礼を受けてモーセ

の律法を守らねばならぬと主張する有力なユダヤ教徒がいました。それに対してパウロは　異邦人は割礼を受けてユダヤ教徒にならなくても、イエス・キリストの十字架の信仰により、（イエス・キリストの神）の民となる」という承認をエルサレム会議で勝ち取ったのです。神はユダヤ人だけの神ではなく、世界の万民の神である。キリスト（メシア）はユダヤ人だけの救い主ではなく、すべての民にとってキリスト＝救済者である。キリストはこの世界に既に来られた。その福音の原点をマルコは、福音が歴史的に世界に展開される救済史の中で、初めて文書の形で残そうとしているのです。実に壮大な企てです。

《神の子イエス・キリストの福音の初め。預言者イザヤの書にこう書いてある。見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの道を準備させよう」。》（マルコ１章１～２節）

初めと言う言葉はもう１箇所、旧約聖書：創世記１章に記載されています。　初めに神が天と地を創造した」と言う言葉です。その時には地には何もなかった。唯闇と混沌があり、神の霊は水の上を動いていた。まるで現在と同じようです。現在も闇があり、混沌があり、サタンの力が滅ぼされ切ってはいないように感じられます。精神の異常や、肉体の患い、飢えや差別に苦しむ人々、またわけも分からぬ殺人など、苦しみや悲しみが満ちているこの世界、　光あれ」と言う神様の言葉で、現在もはっきりと人間に光が、真の希望が欲しいのです。いや　（イエス・キリストの福音の初め」という言葉こそ『現在の光あれ』なんです。

旧約聖書、新約聖書というのは、私たちを救おうとする神様の歴史　救済史）であり、私たち人間に対する神様の、旧約は古い約束、新約は新しい約束なのです。神はご自分のお創りになった人間をこよなく愛して下さっていました。にも拘らず、と申しましょうか、人間は神に向かってどのように生きてきたでしょうか。旧約聖書の救済史と云われている文章を読みますと、神様が人間に与えてくださった色々の約束が書いてあります。主なものだけでも書くと、

アブラハムには・・・子どもが生まれないアブラハム夫婦に老年になって、イサクが神の約束に従って与えられました。そして　あなたの子孫は星の数のようになる」と言う約束が与えられ、神様に導かれるままに目的地も知らずに神に身を任せて従ったアブラハムは、行き着いた豊穣なカナンの地を約束どおり頂きました。イサクの子ヤコブには・・・大いなる国民にするという約束が与えられ、イスラエルと言う名を頂きました。エジプトよりイスラエル民族を救い出す使命を与えられた　その大いなる解放の事をエクソダス＝脱出と言いますが）モーセには・・・十戒を与え、イスラエルの民が神様の戒めに従う時には、父祖からの嗣業の地カナンに定着し、繁栄する事を約束し、ダビデには・・メシアはダビデの子孫から出て、その王座の永遠の繁栄が約束され、（ダビデ王的メシア）とイスラエルの民は受け取っていました。もし神のご意思に従う時には、と言う条件はありますが　（つまり十戒、律法を誠実に守る時）。しかし残念ながらイスラエルの民は、神を愛し、神に従い、貧しい者と仲良く生きるという、神の憐れみ深いご意思に背き、その罰としてバビロンへ民族全部が囚人として捕らわれ流されると言う憂き目に会います。その時、第二イザヤは・・・それまで民族の大きな希望として許されていたかに見える、ダビデ王的メシアではなく、苦難の僕としてのメシア＝十字架のキリストの予告ともと思われる予言を、救いの言葉とし

て発します（主の僕の歌」として記載される大切な予言です。次の箇所です。（イザヤ書　４２：１～４　４９：１～６。５０：４～９　５２：１３～５３：１２）。その他捕囚期における諸預言者―例えばエレミア・アモス・ホセヤ等は、繰り返し民に悔い改めを促し、一旦は悔い改める方向へとイスラエルの民達は動くのですが、民達をリードする、サドカイ人（神への礼拝を司る者、いわば僧達）、ファリサイ派や律法学者達、（倫理的道徳的生活態度を指導し、神に従う正しい生き方を教える指導者や学者達）が神の真意を悟らず、主の平和を守らず、神の前に己を低くせず、貧しい者を虐げ、弱者を救わず、表面的な倫理箇条に沿うことだけに終始します。神からの立派な約束を頂きながら、人間は神の言葉に従う事、神の義（神の愛）に沿う事が出来ないのが明らかになってきたその時、神はそれでも人間を救いたいと、もはや人間が自分の意志と力だけで神の救いの目的に達すると言う方法に恃まず、イエス・キリストをこの世に送って、人間を無条件で救おうとされるのです。『神の子イエス・キリストの福音の初め』はそのイエス・キリストの事実を伝えているのです。十字架の上で、イエス様が亡くなられる時、７つの言葉を発せられますが、その内の一つ「事終わりぬ＝完了した」と言う言葉は神の約束、すなわち、神がイエスに託された神ご自身の御目的《人間の救い》が、イエス様の、父なる神への従順によって、完成、成就したと言っておられるのです。それは《救いはイエス・キリストの十字架によって、無条件で成し遂げられた。それだけを信じなさい》と言うことです。

さて、弟子達が、イスラエル民族にイエス・キリストの事実を話す際には、イエスとキリストは別々の意味を持っていました。キリストと言う意味は、彼らの救い主を意味している事は、ユダヤの人には明らかな事でした。しかし、イエスの十字架によって救われる事がイスラエル民族以外の異邦人（主としてギリシャ語を話す人たち）に伝えられるようになると、イエス・キリストと言う名は、畑野栄一のような姓名と受け取られるようになって来ました。これは宣べ伝える側にとっては、一番肝心な事が明らかにされない、困った状態ですので、主（キュリオス）と言う言葉《イエスは主であると言う信仰告白の大切な事をパウロは言っています》を使うか、或いは神の子と言う言葉を『イエス・キリスト』のあたまにつけて、イエス・キリストが神の権威と力を持っておられる方であり、唯の人間ではない事を表したのです。マルコは福音書の冒頭に『イエス・キリストは神の子であり、神様の権威と力を頂いて生まれてきた方ですよ』と言っている訳です。その上に、イエスとして生きておられた時、父なる神に大変従順であり、神の愛を実行された。耳の聞えない者は聞えるようにしてやり、眼の見えない者は見えるように、足なえを歩ませ、病の者を癒し、貧しい者に福音を聞かせると言う生涯を過ごし、最後に「人間の罪を拭い去る為に」罪びとの人間の代表として，犯罪人の処刑の道具である十字架にかかって，人間への呪いの的となって死ぬと言う、生涯を送られたのです。罪を犯したことのないイエス様が、唯父なる神様のご意思に従順に従って、単に死刑に処せられるだけではなく、今まで自分と一体であられた父なる神から十字架上で絶縁され、親子の縁を引き裂かれると言う苦しみを経験されるそのことによって、神が人間に赦しを与えられ、人間は今まで背いていた神の方をようやく向くことが出来るようになる。その時私たち信じる者に与えられた、復活者キリストの霊＝聖霊によって、イエスはキリスト＝私たちの救い主

である事を信じ告白し、また私たちは、イエス様の愛のご性質に与る事が出来るようになったのです。その事を「マルコの福音書」によって、これから学んで行きたいと思っている訳ですが、今日は『イエス・キリストの福音の初め』の意味を考えて見ましょう。

「イエス・キリストの福音の初め」の意味する事は、地上のイエスの言葉と教え、その働きと生涯の事実こそ、エルサレムから始まり今や全世界に宣べ伝えられ、万民に救いを与え、新しい時代を齎している『復活者キリスト』の発端であり、根源である、と言っているのです。」これは、創世記の世界における神の創造の「初め」と言う言葉に対応して、新しい《時代の開始》を告げる、ラッパの響きとなる、と市川氏は云っておられるが、私も同感です。

「はじめに」神は天と地を創造して、人をその中に置かれた。所が人は神に背き、その歴史は罪と死が支配するものとなった。その歴史の終わりに至って、神は選ばれた民イスラエルを通して準備して来られた救いのみ業を成し遂げ、恩恵によって支配し給う新しい時代を開始された。神はその新しい時代の支配を《神の子イエス・キリスト》によってなされるのです。今がその時代です。この御子キリストによる神の支配を知らせる言葉が福音です。新しい時代の「初め」は、からの墓に至るイエスの地上の生涯の真実です。十字架、復活に至るイエスの生涯は、天地の存在以上の重さを持っているのです。

ギリシャ語のキリストは、ヘブル語のメシア（油注がれたる者）が原語ですが、神が世を救う為に遣わされる救世主を意味し、イエス・キリストが唯一の救い主であるとの信仰を表す為に、キリストと言う名称はイエス・キリストに限って用いられた。即ち、キリストこそ私たち人間に対する神の最終的な語りかけの言葉であること、そしてキリストは、十字架につけて殺され、神によって復活させられて「今も生きておられる方」です。「キリスト」と呼んでいる方は、このような「復活者イエス」のことなのです。だから、キリストを語る時、どうしても十字架につけられたイエスに触れなくてはなりません。「十字架につけられたキリスト」とは、復活されたキリストが、聞く者に向かって「私はあなたの為に死んだ」と、「私とあなた」の関わりの中で語っておられる事なのです。この十字架の言葉を真剣に、全存在を以って聞く時、私たちはそれを信じるか、信じないか、態度決定を迫られます。信仰すると言う肯定的な態度に導き入れられる時、キリストの霊との交わりが生じ、私と言う人間が新しく変わって行きます。勿論人によってその変り方は早かったり、ゆっくりであったりするわけですが、一般的な変わり方は、その人間が希望を失わなくなり、何時も喜んでおり、神と人に対して愛を現すようになると言われています。しかし、洗礼を受けてたちまち変わる、奇跡的に私の悪い所は美しくなると考えていると、大抵失望します。私も洗礼後全く自分が変わらないので、聖餐を辞退しようとした事があります。時の牧師に《何を言うのです。人間はなかなか清くなったことがわからない。だからこそ聖餐によって清められる必要があるのですよ》と叱られました。

今日私の言いたかった事は、大いなる希望です。「イエス・キリストの福音の初め」が既に始まっているのです。２千年前に。神が世界を創造された初めは、何千年前か

何万年前か、また聖書に書いてある通り創られたのかどうかは知りませんが、神様の愛と平和が満ち亙る世界がうまく来ませんでした。でも今度は、「イエス・キリストの福音　喜ばしい便り、おとづれ）の初め」なのです。そのイエス様はこの世に既に来られたのです。そして　おたしは既に世に勝った」と言われたのです。勿論私たちの目には、現在の世界はまるで絶望のように見えます。けれども私たち信じる者は、キリストの福音を信じている。キリストにあって生かされている。キリストと共に居られる　私を信じて下さる神」は、[神に対しアーメンと言っている私]を肯定し、私に[そうだ、よろしい]と言って下さっているのです。今生きて働いていて下さるキリストが、私たちと共にある限り、神の約束によって、私たちの前途は光の中にあると信じています。「イエス・キリストの福音の初め」は希望に満ち溢れている歴史の初めです。

私・栄一の信仰はキリストの十字架、つまり神の愛がこの世に必要欠くべからざるもの、と気づいた事が始まりでした。次に必死で人を愛しようと、戒めを守る事を考えました。駄目でした。再び十字架を指し示され、『自分を捨て、自分の十字架を負って私に従いなさい』と言うイエスの言葉に取り組んだ時、自由が来ました。そしてキリストの復活こそ、私の希望と確信させられました。分からなかった聖霊様が何時も私と共にいて下さる。何時もと言うのは、私が必要とする時にはいつも、と言うことです。

聖霊に頼る生き方は、生長する為肥沃な土地を必要とする一粒の種のようなものです。この肥沃な土地とは、私たちの心の姿勢だけではなく、それを支える外的な環境を含みます。私たちが霊的生活をすることに真剣に取り組もうとするならば、その霊的生活が生長し、成熟して行く環境作りに対して、努力が必要です。具体的に云えば、教会に礼拝に行くこと、聖書を読むこと、よき友人を選びお互いに刺激しあうこと、成るべく沢山の人と、特に困っている人と交わり、話し合うこと　交通を含む)、信仰的な読書をすること、信仰と関係なくてもこの世における智恵の本を読むこと、など。

天のお父様、

今日私たちは『イエス・キリストの福音の初め』と言う事を学びました。あなたの愛が、イエス・キリスト様という希望を、私たちの胸に刻み込でくださる事を、です。主イエスよ、あなたは私をそばに置き、私を捉え、私のために戦い、守り、支え、私を慰め、私を父なる神に捧げたいと思っておられます。それはまさに、私を失わないようにと言う聖なるみ業です。しかもそれでも、私は自由なのです。主よ、どうか私が自由に、あなたの愛を選び取れますように導いてください。あなたを見失う事がありませんように、あなたが指し示してください。イエスのみ名によって祈ります。アーメン！

もう一言。マルコ福音書の15章に、イエスの死を見た百人隊長が　真にこの方は神の子であった」と証言しています。マルコはこの福音書の初めと終りを《イエスは神の子であった》と壮大に締めくくったのです。